28P-am472

屠蘇散の起源と変遷に関する考察

〇毛利　千香[1], 御影　雅幸[1]（[1]金沢大院薬）

【目的】元旦に薬酒として飲用される屠蘇散は、一説に三国時代の医師、華陀が考案した処方であるとされている。しかしながら、その処方はこれまで明らかにされておらず、屠蘇の名称が最初に記載され、その飲用方法が示されている「千金方」の記載文と比較されたことがなかった。また、「千金方」に記されている構成生薬は、基本的に大黄、白朮、桂心、桔梗、蜀椒、烏頭、菝葜の七種類であるが、現在日本で服用される屠蘇散には烏頭や菝葜などが配合されることはなく、代わりに陳皮や丁字など芳香のある生薬が配合されることが多い。

　そこで本研究では、①まず華陀が考案した屠蘇散の起源と考えられる処方を明らかにし、「千金方」の記載との違いを明確にした。また、②生薬を浸漬した酒の材料とその製法、生薬浸漬時に使用された薬嚢の素材とその染料植物について考察した。さらに、③中国および日本における屠蘇散の構成生薬の変遷を調査し、それに影響を与えた人物を明らかにした。

【結果および考察】①屠蘇散の起源と考えられる処方名は「辟疫酒」で、名称以外の記載は構成生薬も含めて「千金方」とほぼ同様であった。②生薬を浸漬させた酒の原料は黍であり、麹は小麦を原料とした春酒麹または荒麹が使用され、酒は麹末に対し 1.5 倍量の水で製された。なお、黍の量は規定されておらず、麹による発酵の強弱によって決められた。また、薬嚢には茜根で染色された絹製の袋が使用された。③構成生薬の変遷は、中国では防風、赤小豆などが加味されることはあってもその基本は「辟疫酒」の生薬であったのに対し、日本では戦国時代末期に曲直瀬道三が烏頭と菝葜を除き、18 世紀半ばには白朮、桔梗、防風、山椒、肉桂の五味が基本となっていたのが明らかになった。